

昨年の大規模停電から教訓

自家発電設備を増強

製鉄記念病院 避難所も設置へ

製鉄記念室蘭病院（室蘭市知利別町）は昨年11月の大規模停電を受け、停電時に脳卒中などの診察に必要なコンピューター断層撮影装置（CT）を利用できるよう、病院内の自家発電設備を増強した。さらに災害時に避難する一般市民を受け入れて、食料、水、簡易ベッドなどを備蓄する災害対策を進めている。

（相沢宏）

同病院は、新日鉄住金室蘭製鉄所の自家発電設備から専用の送電線が必要な電気を受け、同病院は、新日鉄住金室蘭製鉄所の自家発電設備から専用の送電線が必要な電気を受け、

大量の電気が必要なCTを使えなかったことなどから、製鉄病院には救急患者が続々と搬送されたという。

製鉄病院は、室蘭製鉄所からの送電が途絶えた場合の電力確保が課題だった。病院内に自家発電設備はあるがCTを使うには能力が足りなかったため今年9月末、設備を改修してCTへの専用配線も設けた。さらに別の発電設備を新設して電気の供給力を高める。

同病院は、来秋に開設予定の「がん診療センター」が入る新しい施設を建設中で、建物内の講堂（約300平方メートル）を災害時、住民を受け入れる避難所にする予定。備蓄庫も設け、食料や水、折り畳み式の簡易ベッドを用意し、避難者も利用できるようにする。

同病院は「『大停電の被害を免れたから良かった』ではなく、多様な状況を想定して準備を進めることが地域の病院の責務だ」と話している。



大規模停電の教訓を踏まえ、自家発電設備の増強などの災害対策の充実を図る製鉄記念室蘭病院